

**[A年] 受難節第5主日(2021年3月21日)****【旧約聖書日課】創世記 25章29～34節**

<sup>29</sup>ある日のこと、ヤコブが煮物をしていると、エサウが疲れきって野原から帰って来た。<sup>30</sup>エサウはヤコブに言った。

「お願いだ、その赤いもの(アダム)、その赤いものを食べさせてほしい。わたしは疲れきっているんだ。」彼が名をエドムとも呼ばれたのはこのためである。<sup>31</sup>ヤコブは言った。

「まず、お兄さんの長子の権利を譲ってください。」

<sup>32</sup>「ああ、もう死にそうだ。長子の権利などどうでもよい」とエサウが答えると、<sup>33</sup>ヤコブは言った。

「では、今すぐ誓ってください。」

エサウは誓い、長子の権利をヤコブに譲ってしまった。<sup>34</sup>ヤコブはエサウにパンとレンズ豆の煮物を与えた。エサウは飲み食いしたあげく立ち、去って行った。こうしてエサウは、長子の権利を軽んじた。

**【使徒書日課】ローマの信徒への手紙8章1～11節**

<sup>1</sup>従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。<sup>2</sup>キリスト・イエスによって命をもたらず靈の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。<sup>3</sup>肉の弱さのために律法がなしえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。<sup>4</sup>それは、肉ではなく靈に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした。<sup>5</sup>肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、靈に従って歩む者は、靈に属することを考えます。<sup>6</sup>肉の思いは死であり、靈の思いは命と平和であります。<sup>7</sup>なぜなら、肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従えないのです。<sup>8</sup>肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありません。<sup>9</sup>神の靈があなたがたの内に宿ってい

るかぎり、あなたがたは、肉ではなく靈の支配下にいます。キリストの靈を持たない者は、キリストに属していません。<sup>10</sup>キリストがあなたがたの内にられるならば、体は罪によって死んでいても、“靈”は義によって命となっています。<sup>11</sup>もし、イエスを死者の中から復活させた方の靈が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその靈によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。

**【福音書日課】マタイによる福音書20章20～28節**

<sup>20</sup>そのとき、ゼバダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。<sup>21</sup>イエスが、「何が望みか」と言われると、彼女は言った。「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください。」<sup>22</sup>イエスはお答えになった。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか。」二人が、「できます」と言うと、<sup>23</sup>イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右と左にだれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、わたしの父によって定められた人々に許されるのだ。」<sup>24</sup>ほかの十人の者はこれを聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた。<sup>25</sup>そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。<sup>26</sup>しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、<sup>27</sup>いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。<sup>28</sup>人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ

## 創世記 25章29～34節

29あるとき、ヤコブが煮物をしていると、エサウが疲れ切って野から帰って来た。30エサウはヤコブに言った。「その赤いもの、その赤いものを食べさせてくれ。私は疲れ切っているのだ。」彼がエドム〔訳→赤い〕と呼ばれたのはこのためである。31ヤコブが、「それでは今すぐに、兄さんの長子の権利を私に売ってください」と言うと、32エサウは、「ああ、もう死にそうだ。長子の権利などどうでもよい」と答えた。33ヤコブが、「今すぐ、誓ってください。」と言ったので、彼は誓って、長子の権利をヤコブに売り渡した。34ヤコブがエサウにパンとレンズ豆の煮物を出したので、彼は食べて飲み、そして立ち去って行った。エサウは長子の権利を軽んじた。

## ローマの信徒への手紙 8章1～11節

1従って、今や、キリスト・イエスにある者は罪に定められることはありません。2キリスト・イエスにある命の霊の法則〔別訳→律法〕が、罪と死との法則〔別訳→律法〕からあなたを解放したからです。3律法が肉によって弱くなっていたためになしえなかったことを、神はしてくださいました。つまり、神は御子を、罪のために、罪深い肉と同じ姿で世に遣わし、肉において罪を処罰されたのです。4それは、肉ではなく霊に従って歩む私たちの内に、律法の要求が満たされるためです。5肉に従う者は肉のことを思い、霊に従う者は霊のことを思います。6肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和です。7なぜなら、肉の思いは神に敵対し、神の律法に従わないからです。従いえないのです。8肉の内にある者は、神に喜ばれることができません。

9しかし、神の霊があなたがたの内に宿っているなら、あなたがたは肉の内ではなく、

霊の内にあります。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。10キリストがあなたがたの内におられるならば、体は罪によって死んでいても、霊は義によって命となっています。11イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬべき体をも生かしてください。

## マタイによる福音書 20章20～28節

20その時、ゼベダイの息子たちの母が、息子たちと一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、願い事をした。21イエスが、「何がしてほしいのか」と言われると、彼女は言った。「私の二人の息子が、あなたの御国で、一人はあなたの右に、一人は左に座れるとおっしゃってください。」22イエスはお答えになった。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。私が飲もうとしている杯を飲むことができるか。」彼らが、「できます」と言うと、23イエスは言われた。「確かに、あなたがたは私の杯を飲むことになる。しかし、私の右と左に座ることは、私の決めることではない。それは、私の父によって定められた人々に許されるのだ。」24ほかの十人の者はこれを聞いて、この二人の兄弟のことで腹を立てた。25そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っているように、諸民族の支配者たちはその上に君臨し、また、偉い人たちが権力を振るっている。26しかし、あなたがたの間では、そうであってはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者となり、27あなたがたの中で頭になりたい者は、皆の僕になりなさい。28人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

**黙想のためのノート****次主日聖書日課について**

・3月21日「受難節第5主日」の日課主題は「十字架の勝利」。古い西方教会暦の伝統では、「受難節(四旬節)第5主日」を「受難の主日」と呼び、この日からの二週間をキリストの受難と死を記念する狭義の「受難節」と呼んできた。現代カトリック教会暦では「棕櫚(枝)の主日」を「受難の主日」と呼び「第5主日」の古い伝統を必ずしも継承していないが、教団聖書日課は、「第5主日」を「受難の主日」と呼ぶ伝統を継承する形で、主の十字架の受難の意義に焦点を当てた聖書日課が定められている。

**旧約日課(創世記25章より)**

・「創世記」は、旧約正典中「律法(トーラー)」の第一巻であり、「聖書」全体に対する基本姿勢を示す文書と位置づけて理解されてきた。内容的には、メソポタミア文明圏に共有されていたと考えられる「天地創世神話」、および、おもに北王国(イスラエル=エフライム)領域で伝えられていたと考えられる「族長伝承」の二つによって構成されている。おそらく、「律法」五書および「預言者」各書をもって「正典」が編纂される過程において、「モーセの出エジプト伝承」を前史とする「イスラエル建国史」をより古い「族長伝承」と結びつける目的で配置されてきたのだろう。

・「創世記」の「族長伝承物語」は12~50章に相当するが、これはさらに「族長アブラハム伝承物語」と「族長ヤコブ伝承物語」に明確に区分される。両族長の間世代である「族長イサク伝承」は、両伝承物語を接続させるために補助的に用いられているに過ぎない。「アブラハム伝承物語」と「ヤコブ伝承物語」の区切り目となるのが25章で、前半に「アブラハムの死」が物語られ、後半に「ヤコブ(と双子の兄エサウ)の誕生」物語が置かれている。日課箇所は、「ヤコブ誕生物語」の一部で、27章以下で物語られる「ヤコブとエサウの相続権争い物語」の伏線を提供している。

・「長子の権利」と訳されている語(ベコーラー)は、「初子/初穂」が原意で、「創世記」ではこの箇所と関連する27:36のほかにか所(4:4, 43:33)で現れるが、「律法」五書全体では他に「申命記」で「長子権」の規定が述べられる中で用いられるのみ(申21:17)。「申命記」の当該規定には、「父の財産を相続するとき長子が二倍の分け前を受ける」とあるが、これは、複数の妻(母)が子を残した場合の好悪に基づく不当な扱いを禁じた規定で、必ずしも一般規定とは言えない。この逸話でヤコブとエサウが取引したとされる「長子の権利」が意味していたことが何であるのかは明確ではなく、実際は「長子・初子の享受する特別扱い」を漠然と指しているのであろう。

・この逸話は「ヤコブ誕生物語」の枠組みの中で物語られているものであり、「エサウ」が「エドム」の先祖であることの原因譚を物語るものであるが、「創世記」は、

明らかにこれを「青年期兄弟の戯れごと」として物語っている。その意味では、この逸話を「二人の兄弟の運命を決定づけた出来事」のように位置づけるのは、行き過ぎた解釈であろう。おそらく、ここでは、「長子の権利」と訳されている「初子に投影された神の特別な恵み」に対する信仰的感受性の重要性が問われている。「初子」誕生を巡る「神の特別な恵み」のあり方は、先行する「アブラハム物語」の中で「イサク誕生の逸話」として主要な主題として扱われている事柄なのである。

**使徒書日課(ローマ8章より)**

・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロが未訪の「ローマの諸教会」を訪問する前にその訪問計画をあらかじめ伝え、その後の自身のエスパニア伝道計画への協力を求めるために記された書簡。「ローマの諸教会」は、当時すでに「異邦人・ユダヤ人混成教会」として成立していたと考えられるが、使徒パウロは新しい異邦人伝道計画(エスパニア伝道)への協力を求めるに際して、異邦人伝道の意義と救いにおける異邦人とユダヤ人の関係性の神学的土台を提示することによって、ローマの異邦人信徒にもユダヤ人信徒にも伝道協力への神学的動機づけをしようとしている。

・日課箇所は、異邦人もユダヤ人もすべての者がイエス・キリストと結ばれること(洗礼←6章参照)によって救いにあずかるという原理が示されている。

・本書簡で繰り返し「法則」と訳される語は(3:27, 7:21, 23, 25, 日課箇所の8:2)、原文ギリシア語で「ノモス」で、他箇所では「律法」と訳される語である。「ノモス」は、ギリシア語の一般的語義は「法則」であるが、「ギリシア語訳旧約聖書」でヘブライ語「トーラー」の訳語として用いられているため、新約でも「トーラー」の訳語として「ノモス」が用いられている。新約の「ノモス」は、一般的語義から、どの言語でも「法/法則」を意味する語で訳されてきた。一方、旧約の「トーラー」は新約「ノモス」の訳語と同じ訳語(日本語訳であれば「律法」)が充てられることもあるが、ヘブライ語「トーラー」の語義に即して「教え」と訳されることが多い。使徒パウロは、「ノモス」の用語を、「トーラー(教え)」の訳語として用いることもあれば、より狭く「法/法則」の意味で用いている場合もあり、しかも、パウロ自身はその用法の曖昧さを自覚していないと思われる。それによって、パウロの「律法論」は、しばしば、全肯定と全否定の両極端に揺れている。パウロが「ノモス」をどちらの語義で用いているかをある程度峻別することも可能であるが、解釈者の恣意性を排除できないので、ここでは、いずれの用例も旧約ヘブライ語「トーラー」の語義に即して「教え」と訳出を統一することで一定の解釈を取ることを試みておく。

・「霊(プネウマ)」と「肉(サルクス)」の対義語法は、パウロ独特の用法で、一般的な「霊肉二元論」ではなく、それぞれ「神由来」、「人間由来」という意味で用いられている。「体(ソーマ)」もパウロ独自の用法がある。

## 福音書日課(マタイ 20 章より)

・日課箇所は、「エルサレム入城(受難の一週間の始まり)直前の出来事として、三度目の「受難予告」(直前箇所)および「エリコの盲人の治癒」(直後箇所)とセットで「第二の受難予告伝承」を構成する逸話である。「マタイ福音書」と「マルコ福音書」は、冒頭で異なる状況設定を示しているが、主要な主イエスの教え部分はほぼ異同なく伝えており、よく保存されている。

・前半冒頭で主イエスへの願いを申し出る人物を、「マルコ福音書」は「ゼベダイの子ヤコブとヨハネ」(マルコ 10:35) 当人らであったとしているが、「マタイ福音書」は「ゼベダイの息子たちの母」としている。この女性について、「マタイ福音書」は、主イエスの十字架死の場面で間近に付き添っていた女性たちの中の一人として明示しており(マタイ 27:56)、「マルコ福音書」などが明示していないのと対照的である。

・もう一点、「マルコ福音書」との重大な異同は、願いを申し出た弟子たちに対して答えられた主イエスの言葉の中に、「マルコ福音書」は「わたしの杯」と共に「わたしの洗礼」が含まれているのに対して、「マタイ福音書」では「わたしの杯」だけになっている。「洗礼」は、「マタイ福音書」では重要な鍵語であるが、「大宣教命令」(28:16 以下)が示唆するように、16~18 章で提示される「小さい者を受け入れる《教会》」の入口を象徴するものである。日課箇所は、後半部分で主イエスに従う者の「仕える者」としての献身犠牲的な生き方が示される文脈にあり、「マタイ福音書」は、これを広義の《教会メンバー》に求めることとしてではなく、狭義の《主に従う弟子たち》に要求されることとして区別するために「わたしの洗礼」を除いたのであろう。それによって、「わたしの杯」にあずかる「聖餐共同体」を、「わたしの洗礼」にあずかる「洗礼共同体」の中核集団と位置づけているのかもしれない。

## 来週の誕生日 (3月21日~27日)

## 主日礼拝の讚美歌から

・21-303 番「丘の上の主の十字架」(= II 182 番)は、米国メソジスト派の伝道者 J.ベナードの作詞作曲、初演は 1913 年で、以降、ラジオ放送や大規模な伝道集会で歌われて大衆的讚美歌として普及。原題を直訳すると「古い荒削りの十字架」。

・21-487 番「イエス、イエス」は、20 世紀スコットランド教会で按手を受けアフリカ宣教に従事した宣教師 T.S.コルヴァンが現地信徒ら自身に伝統音楽に基づいて創作させた讚美歌集『*Fill Us With Your Love*』に収録された讚美歌の一つ。「主の洗足」の記事に基づいて主の愛に従う道を歌う。

・21-522 番「キリストにはかえられません」(= II 195) は、20 世紀に入ってから作られた後期福音唱歌の一つ。作詞者レア・ミラーについては不詳。作曲は、自由メソジスト教会牧師の家に生まれた音楽伝道者でピリー・グラハムと共に放送伝道や大衆伝道に従事した G・ビヴァリー・シェーの作曲。

## 21-303「丘の上の主の十字架」

## On a Hill far away

1. On a hill far away stood an old rugged cross, / the emblem of suffering and shame; / and I love that old cross where the dearest and best / for a world of lost sinners was slain.

Refrain:

So I'll cherish the old rugged cross, / till my trophies at last I lay down; / I will cling to the old rugged cross, / and exchange it some day for a crown.

2. O that old rugged cross, so despised by the world, / has a wondrous attraction for me; / for the dear Lamb of God left his glory above / to bear it to dark Calvary.

[Refrain]

3. In that old rugged cross, stained with blood so divine, / a wondrous beauty I see, / for 'twas on that old cross Jesus suffered and died, / to pardon and sanctify me.

[Refrain]

4. To the old rugged cross I will ever be true; / its shame and reproach gladly bear; / then he'll call me some day to my home far away, / where his glory forever I'll share.

[Refrain]

## 21-487「イエス、イエス」

## Jesus, Jesus, Fill Us with Your Love

Refrain:

Jesu, Jesu, fill us with your love, / show us how to serve / the neighbors we have from you.

1. Kneels at the feet of his friends, / Silently washes their feet, / Master who pours out himself for them. [Refrain]

2. Neighbors are wealthy and poor, / Varied in color and race, / Neighbors are nearby and far away. [Refrain]

3. These are the ones we should serve, / These are the ones we should love: / All these are neighbors to us and you. [Refrain]

4. Kneel at the feet of our friends, / Silently washing their feet: / This is the way we should live with you. [Refrain]

## 21-522「キリストにはかえられません」

## I'd rather have Jesus

1. I'd rather have Jesus than silver or gold; / I'd rather be His than have riches untold; / I'd rather have Jesus than houses or lands. / I'd rather be led by His nail pierced hand

Chorus:

Than to be the king of a vast domain / Or be held in sin's dread sway. / I'd rather have Jesus than anything / This world affords today.

2. I'd rather have Jesus than men's applause; / I'd rather be faithful to His dear cause; / I'd rather have Jesus than worldwide fame. / I'd rather be true to His holy name

[Chorus]

3. He's fairer than lilies of rarest bloom; / He's sweeter than honey from out the comb; / He's all that my hungering spirit needs. / I'd rather have Jesus and let Him lead

[Chorus]